

2020年8月23日(日)
福山バプテスト教会主日家庭礼拝の手引き

1 礼拝の進め方

礼拝プログラムは次のとおりです。このプログラムに沿って、賛美を献げ、祈り、聖書を読みましょう。宣教の部分は説教を読みましょう。

2 礼拝プログラム

聖書1 新約聖書 ヘブライ人への手紙11章8～10節

賛美 新生59 父の神よ 汝がまこと

(または) 新生301 いかなる恵みぞ

個々の祈り *自由にお祈りを献げましょう

主の祈り

聖書2 旧約聖書 創世記12章1～9節

宣教 「信頼」

献げもの 新生658 このささげものを(B) 又は 新生51 かみさまありがとう

*賛美の後に、感謝の献げものとお祈りを献げましょう

賛美 新生讚美歌 674 父み子 聖霊の

黙 禱

3 説教

■墮ちていく歴史 聖書の一番最初に置かれている文書、創世記は、二つの部分に大きく分けることができます。一つは第1章から第11章まで。もう一つは第12章から最後の第50章までです。「前半と後半」と言うにはあまりにも前半が短く、後半が長い…いびつな分け方のようなのですが、確かにここ11章にはっきりとした境目があります。この短い前半は、人類が創造の頂点からどん底へと墮ちていく歴史です。3章で人類の祖アダムとエバは最初の罪を犯す。4章で人類最初の殺人が犯される。それからわずか2章を経、6章5節にしてこのような言葉が記録されています。

6:5 主は、地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのを御覧になって、6:6 地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた。

そこまで増大してしまった悪が、7章に記された大洪水によって一掃され、8章以降においてはノアとその家族による人類の再出発がはかられます。しかし神様に対する反逆と悪の増大は止むことがありません。11章でついに、バベルの塔とその崩壊という結末を迎えてしまうのです。

■救済の歴史 創世記後半にあたる12章以降は、どん底の結末から新たに始まる人類救済の歴史です。

12:1 主はアブラムに言われた。「あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい。

ここから新たな歴史が始まります。「新たな歴史」とは、しかし、このあと50章まで続いている創世記後半だけの歴史ではありません。創世記が終わっても、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記、ヨシュア記…と続いていきます。どこまで続いているのでしょうか？新約聖書の福音書までです。創世記12章以降、旧約聖書の全てが「新たな歴史」の記録です。

■アブラハムという驚異 およそ2,000年にわたるこの新たな歴史の出発点にアブラムが登場します。後に改名してアブラハムとなるこの人は大変驚異的な人物であります。どこが驚異的なのか？彼は、彼だけは、何故か持っていたのです。私達人類の祖が最初の罪を犯したことによって失ってしまった最も大切なものを。何でしょうか？信頼、神様への信頼です。アブラハムは、神様の声を聴きました。「生まれ故郷を離れなさい。私が示す地に行きなさい。」声が聞こえたからと言って、そして、それが真の神様の声であると確信できたからと言って、それでもそう簡単に故郷から出発できるものではありません。その声に従うことが自分にとって絶対的に益になるのだという確信がなければ、則ち、その声の主に対する絶対的な信頼がなければ、誰がそんな危険な旅に出ようとするのでしょうか。誰が、大切な家族を危険にさらしてまでして故郷を去ろうとするのでしょうか。家を捨て、収入先を捨て、親族、知人達、それまで培ってきたネットワークの全てを捨てて、見たことも聞いたこともないような未知の土地へ出て行く…そんなことを誰が敢えて実行に移そうとするのでしょうか。「生まれ故郷を離れなさい。私が示す地に行きなさい」と語ったその声の主に絶対的な信頼を寄せているのでなければ、決してできる事ではないのです。

■人類が失ったもの 創世記第3章、蛇による誘惑の場面を振り返ります。

3:4 蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。3:5 それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」

この言葉を聞いて、エバは善悪の知識の木に手を伸ばしました。神様の禁止命令を犯し、

アダムと共にその実を食べました。蛇は、私達人間のどの部分を狙って誘惑をしかけてきたのでしょうか？信頼なんです。神様に対する信頼を、まずぐらつかせる作戦に出てきたのです。蛇は言った。「それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだよ。」それでエバは疑うようになった。何を疑ったのか？神様の善意ですね。「それを食べたら死ぬ」というみ言葉の裏に何か魂胆を隠し持っておられるのではないか？という考えが頭から離れなくなってしまった。信頼することができなくなったのです。その結果、アダムとエバ、そして人類は善悪を知るものとなりましたが、同時に神様を知るとい知識を失い、信頼というものが人間の心から消え去ってしまうことにもなりました。創世記3章の学び以来、何度か皆さんと分かち合ってきたとおりです。

■小さな出発、大きなビジョン 失われているはずのその信頼が、何故かアブラハムの心にはありました。その信頼は完全なものではなかったかも知れない。彼の心も、もしかすると疑いと躊躇とに満ち、葛藤で渦巻いていたかも知れない。アブラハムが出発するに至った経緯に聖書は触れていません。だから即断だったとは限らない。何年も迷ったあげくにやっと重い腰を上げた結果なのかも知れません。とにかく、最終的には信頼が勝ちました。神様が言われる言葉なのだから、そしてその神様こそは信頼できる方、その約束を必ず守って下さる方なのだから、従おう。そんな決断をもって、一人の人が家族を伴い、小さな出発を果たしたのです。

12:2 わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める／祝福の源となるように。12:3 あなたを祝福する人をわたしは祝福し／あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべて／あなたによって祝福に入る。」

創世記11章までは、人類が堕ちていく歴史、12章から新約聖書福音書までは、新たな救済の歴史。「歴史」というには、それはそれはちっぽけな出発なのですけれども、実はそこに、神様の壮大なビジョンがはっきりと刻みつけられていました。このアブラハムという人物を通して、また後々聖書が明らかにしていくことですが、彼の子孫を通して全世界の人々が神様の祝福の中に入るというビジョンです。

■信頼と言う名の信仰 ヘブライ人への手紙11章8節です。

11:8 信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです。

アブラハムが出発できたのは、彼が信仰をもっていたからであったとこのみ言葉は言っています。向山は敢えて「信仰」という言葉を使わず、「信頼」という言葉を使ってきました。そうです。アブラハムにみ言葉への服従と出発の決断をさせたのは、神様とこのみ言葉を100パーセント信頼する、そういう意味での信仰です。聖書の「信仰」という言葉に

は、「信賴」という意味がしっかり含まれているのです。むしろ「信賴」という意味の方が大きいと言っても間違いではありません。皆さん、これが信仰です。聖書に出てくるピステイスというギリシャ語の殆どを、日本語訳聖書は「信仰」と訳していますので、私達は「信じること」、すなわち神の存在や、聖書の教え、教会の教義を知識として知り、それらを信じることをもって「信仰」だと考えてしまう傾向があります。確かに、神様の存在を信じることは信仰の一部だと言えます。でもそれはほんの一部分にしか過ぎません。聖書のピステイスが伝える信仰とは、信賴です。神様を信賴し、神様のみ言葉を信賴し、信賴するが故に、そのみ言葉にわが身をあずけていくことです。

■祝福への道 小さな出発でありました。しかしこの出発によって、やがてあらわれることになる大いなる祝福への道が開けました。アブラハム、その子イサク、その子ヤコブ、その家族たちがエジプトでイスラエル民族となり、やがて王国を築き、ダビデが生まれ、ソロモンが生まれる。やがて国は滅ぼされてしまうけれども、アブラハムの子孫達は、神様とそのみ言葉への信賴というきずなによって民族としてのアイデンティティーを保ち、次の世代へ、また次の世代へと歴史の中を歩み続ける。約 2,000 年が過ぎます。そしてついに、アブラハムに与えられたみ言葉の約束が驚くべき形で実現されるのです。どんな約束でしょうか？「地上の氏族はすべて／あなたによって祝福に入る」という約束です。どのようにしてですか？私達の救いを成し遂げて下さる主イエス・キリストが、アブラハムの子孫としてこの世に生まれ、出現して下さることによってです。

■信賴の回復 アブラハムの心に、神様への信賴が備えられていたことは驚くべきことだと申し上げました。一方、その信賴は完全なものではなかったとも申し上げました。実際、神様を信賴している人物であるとは到底言えないような行為を、アブラハムはこの後何度も繰り返し続けます。彼もやっぱりアダムとエバの子孫なのです。既に 75 歳を過ぎている彼ですが、訓練が必要でした。失敗しては悔い改め、失敗しては悔い改める、そんな苦しい過程をとおして彼も成長していく必要がありました。

そんなアブラハムとは比べようもなく驚異的なお方が、私達には既に与えられています。キリスト・イエス様です。イエス様は神様のもとから来られた方であり、ご自身が神様であられます。だから、そのみ心にある父なる神様への信賴には、全く陰りがありません。人として生きられる間、イエス様は神様に信賴しました。み言葉の約束を信じました。従いました。従い通して死んでいかれました。そして神様は復活という約束を、イエス様において成就されました。皆さん、信賴、信賴、信賴です！人類のこの悲しく悲惨な状態から私達が救われ、神様の祝福にあずかることができる道は、ただ神様を信賴することです。信賴できます。100パーセント信賴できます。神様は私達一人一人の上に、100パーセントの愛を注いで下さっています。イエス様の十字架がその愛をこの上もなく明白な形で証明して下さっているのです。